

「友愛」が発すべき言葉

—Platonis *Crito* 43 B3–6—

安西眞

I

以下に引用するのは、Pl. *Crito* の幕開けの一部であり、長きにわたって、つまり、我々ヨーロッパ・ルネサンス以降の人間たちが、自分たち自身の古典としてギリシア文献を読み始めて以来ずっと、我々の先達によっては正しい理解を受けてこなかったと筆者が考えている部分である。問題の把握を容易にする為に、少し拡大して引用し、また、代表的と思われるいくつかの近代語訳も付した。写本伝承上の問題は校訂本には記されていない。我々の理解という側面で、大きな、ほぼ決定的な、問題があったことを考えれば、写本伝承の上で問題が表面化していないという事実には、やや不思議な感もある、というコメントを I 点付して、以後、ここでは写本伝承上の問題を議論の対象にしない。

43b Σω. εἴτα πῶς οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με, ἀλλὰ σιγῇ παρακάθησαι;

Κρ. οὐ μὰ τὸν Δία, ὦ Σώκρατες, οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνίᾳ καὶ λύπῃ εἶναι, ἀλλὰ καὶ σοῦ πάλαι

* この論考は 2016 年度の「フィロロギカ」研究集会（成城大学）で読まれた原稿に加筆・修正を加えたものである。口頭発表に際して、ご批評を下された参加者諸氏に感謝をここに記す。この原稿の査読の労をとって下さった 2 氏の査読者には、特にお礼を申し上げたい。中でも、査読者のおひとりは、いちおう本稿を掲載可と認めてくださった上で、ただ、自分には筆者の解決ではなくて別の解決が正しいように見える、とご自分の読み方を提示され、筆者に検討するように促して下さった点、大きな感謝を捧げたい。その無名査読者は、ἀγρυπνία は S. のではなく Cr. のそれだと読むべきだと言う。確かに、当該の文の置かれた文脈には、Cr. が眠ることができないまま、牢に来たという事実を推定できるてがかりが残されている。では、そのてがかりが我々の直面している場面で Cr. の言っている ἀγρυπνία が指示しているものなのか。つまりその読み方のほうが、ここでの、これから筆者が説明する予定の読み方より正しい理解と言えるか、という、それは別問題、とここでは言うべきだろう。τοσαύτηや οὐ ... οὐδ' ἂν を私たちのギリシア語理解の座りのよい場所に置けるかどうか、また、この文脈で Cr. の ἀγρυπνία に話題を振るのが書き手の意図することかどうか、さらに、Pl. がこの対話篇を創作するにあたって何を目論んでいるか、ということが議論すべきことにならざるを得ない。たぶんそれらは、筆者が最初意図したことがらとは本質的にはつながりながらも、規模も性質も全く異なる（恐らくは筆者の能力の範囲を越える）大きな論文を要するかもしれない問題であろう。それで、今回は、査読者の一人が与えてくれた任務の意味はいちおう了解した上で、この文脈での ἀγρυπνία の意味と筆者なりの最初の解決を明らかにし、その査読者の主張する読み方の問題点を簡単に指摘する形に議論を限定したい。

θαυμάζω αισθανόμενος ὡς ἡδέως καθεύδεις· καὶ ἐπίτηδές
σε οὐκ ἤγειρον ἵνα ὡς ἡδιστα διάγῃς.

S. それでいて、どうしてすぐぼくを起こさなかったのだ、黙ってそばに坐っていたりして。 Cr. とんでもない、ソクラテス、ぼくだって、きみの身になったとしたら、こんな苦しみのなかを、眠らずにいたいなどとは思わなかっただろう。そればかりでなく、きみがいかにも気持ちよげに眠っているのを認めて、さっきから感心していたのだ。そしてわざと、きみを起こさずにいたのだ。できるだけ気持ちよくすごしてもらおうと思ってね。

(田中美知太郎)

S. Then why did you not wake me at once, instead of sitting by me in silence? Cr. No, no, by Zeus, Socrates, I only wish I myself were not so sleepless and sorrowful. But I have been wondering at you for some time, seeing how sweetly you sleep; and I purposely refrained from waking you, that you might pass the time as pleasantly as possible.

(H. N. Fowler)

S. Then why did you not wake me right away but sit there in silence? Cr. By Zeus no, Socrates. I would not myself want to be in distress and awake so long. I have been surprised to see you so peacefully asleep. It was on purpose that I did not wake you, so that you should spend your time most agreeably. (G. M. A. Grube)

2

上に引用したギリシア語原文とそれに対するいくつかの翻訳は、現段階での、この部分に対する古典学徒たちの理解の縮図を示していると考えられることができるが、同時に共通の問題を抱えていると私は考えている。それらは、1. οὐδ' で始まる文が上の引用部でどのような文脈上の役割をはたしているかを、明確な形ではまったく示せていない。2. τοσαύτη「それほどの」という指示語の指している対象が何であるのか*1、どのような機能をこの文で持っているのか、何を共通の基礎指示対象として、Cr. は S. との言語交流をここで持と

*1 引用ギリシア語中の τοσαύτη について中立的な理解をすれば、ἀγρυπνία καὶ λύπη に付された限定的な、属性的な指示語で、ἀγρυπνία καὶ λύπη の性質・種別を問題にしている、と考えるべきであろう。その点に関しては、田中訳が最も妥当と思える。Fowler 訳は、ἀγρυπνία καὶ λύπη という症状の程度に、Grube 訳は症状の持続に絞ってしまっている。もちろん、ギリシア語と近代諸語の隔絶を考えれば、ぴったりの訳は難しいことは筆者も承知しているから、この検討は訳の良否の問題を論じているのではない。あくまでも、だれのどのような状態を指して、ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνία καὶ λύπη εἶναι を理解しているかを問題とした場合どう評価すべきかを論じている。田中訳は、「だれの」の問題は別として、τοσαύτη の統語論的機能の理解に関しては最も評価できる。

うとしているのか、要するに談話分析論的によくわからない訳になっている。この2点である。よくわからない訳というより、明らかに間違っているらしく筆者には見える、と言いたい。ただ、後者の点に関して、田中訳はこれからの小さな探求にとって重要な問題を提供しているように思われる。

「こんな苦しみのなかを、眠らずにいたい」という訳は、はっきりとした問題を抱えている。τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη において τοσαύτη は τε ... καί で結び合わされた両項にかかる、と理解するのが常識的なギリシア語の読み方であろう*2。しかし彼はそう理解しようとしていない。簡単に言えば、ἀγρυπνία と λύπη を順を逆にし、τοσαύτη τε λύπη καὶ (τῇ) ἀγρυπνία という形で、しかも ἀγρυπνία には τοσαύτη がかからない形で訳出しているのだ。

ただ、これは単なる不注意ではないと思う。引用した部分の最後の文で明らかになっているように、Cr. の前で、数時間ほど、S. は熟睡の状態であったのだ。そのような状態を見てきた Cr. には、S. の陥っている状態をもとにして τοσαύτη ἀγρυπνία と言うことはできない。このことが（恐らくは意図的に、かつ断り書きなしに、）原文を変更したとしか言いようのない田中の訳出に繋がった、と私は推測する。訳出の態度としてはおおいに問題はあるが、たぶん一度も正確な理解をされたことがなかった箇所理解へと我々が近付くためには重要な一歩であるかもしれない、という風に私は評価したい。

τοσαύτη という指示語を、話者である Cr. は、彼自身と S. との共通理解として、共有できると信じて指示語として使用している。指示語である以上、Cr. の考えに寄り添うならば、S. にも容易にその指示可能であるものへの指示を了解できるという前提が彼にはあったに違いないと、我々は考えるべきだ。だからこそ、逆に、ひとは容易に τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη を、死刑の執行を前にしての S. の精神的状態に結びつけるべきだと信じて読み解こうとしてきたのだろう。この事実がふたりの精神に、どんな形であれ、のしかかっていない筈はないからだ。しかし、この、当然そうあってしかるべきとも見える前提は我々の目の文字列が知らせている統語論的・語彙論的あるいは談話分析論的事態とは合致しない。

λύπη を、S. が置かれた死刑実行間近という状況から生じる「精神的な苦痛」と名付けて、その上で Cr. が発言しているとする。この条件の限りでは、この指示は可能である。どういう性質のものであれ、それは存在し（ἐν τῇ νῦν παρεστῶσῃ συμφορᾷ B8）、それに S. は耐えている（ὡς ῥαδίως αὐτὴν καὶ πρῶως φέρεις B8-9）と Cr. は見ているのだから*3。た

*2 Denniston, §16.

*3 実際には、S. は耐えているのではなく、もうその不安や迷いを克服し終えている、と理解するのが正し

だし、Cr. にとっては、恐らくは、理解不能な形で、ではあるが。しかし、一方の *ἀγρυπνία* は、現実には、これが言うところの精神的圧迫から生じる「不眠状態」であれ、何か他の理由によるものであれ、S. と共にあるものとしては目の前には存在しない。それどころか、S. がそれを蒙っていないことを Cr. は「知っている」(*θαυμάζω αἰσθανόμενος ὡς ἡδέως καθεύδεις*)。ひとつは、Cr. があると信じ、そして実際に、S. にあると知覚したものであり(*λύπη*)、ひとつは、少なくとも彼が訪れたこの早朝には、なかったと「知っている」ものである(*ἀγρυπνία*)。このふたつのものを、*τε ... καί* によって I 組の概念としてまとめた上で Cr. が発言していると想定することは難しい。ましてそれらを *τοσαύτη* という指示語で一括して Cr. が指示したと信じることは筆者にはできない。

さらには、*τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη*³、死刑の執行を前にしての S. の精神的状態と直結すると信じて読み解こうとするのは*4、つまりは *τοσαύτη* を *ση* にある程度近付けて読もうとするのは、「友愛」という言葉の前提を無視することになる、とも筆者には思える。なぜなら、この真ん中の *οὐδ' ἂν* に始まる文には、それをどのような非現実的な響きを内包した文 (*οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον*) という表現形態でくるんで読み、あるいは翻訳しようとしても、「君の苦境にぼくは居たくない」という響きをどのみち持たざるを得ないという結果になる。「友よ、君の今在る状態には、ぼくは、可能であるならばだが、なりたくないのだ」という響きを払拭することはできない。この文は、どのような粉飾を凝らした理解で対峙するにせよ、私たちが *ἀγρυπνία καὶ λύπη* を S. の現状と直結させようとする限りは、ほんとうの友達の発する言葉には、なりにくいのだ。

τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη と、死刑の執行を前にしての S. の精神的状態とを結びつけることが、どんなに誘惑に満ちたものであっても、また、巨大かつ複雑な各種社会集団に圧迫されて「苦悩と不眠」を強いられている近代の先進国に住まう私どもにとっては、ほとんど避けることのできない「読みの回路」ではあっても、しかし、にもかかわらず、その直接の結びつきを疑い、一旦解くこと、これが、我々に要求されていることのように私には思える。

3

οὐδ' ἂν αὐτὸς と 2 番目の「文」が始まることも、その「我々に要求されている」道をとることを勧めているように思える。けして *οὐδ' ἂν ἐγὼ ...* ではないのだ。後者の方がより

い。注 5 参照。

*4 正確には、Cr. が忖度する限りでの、という限定をつけるべきであろうが。

σύを（2次的にではあれ）示唆する力はおおきい。なぜなら、「私は」という言葉は、「あなたは」なしには存在できない言葉であるからだ。さらに言えば、ἀγρυπνία καὶ λύπηにつけられた指示詞が τοσαύτηであって、けして σῆ でないことも今言ったような種類の脱出口を探てみることを勧めているかに見える。σῆであれば、ἀγρυπνία καὶ λύπηを考えるに際して、それを S. が陥っているに違いない、あるいは陥っているかもしれないと Cr. が S. の心の中に「付度しているかもしれない」、つらい心的状況と結びつけて理解する以外には道はないだろうからである*5。

さて、そのような「我々に要求されている」道を探るにあたって、まず第 I に、Burnet (ad 43 B3) の補いの勧めが正しいものであることを確認しておこう。彼は οὐ μὰ τὸν Δία の後ろに、ἐπήγειρά σε を補って読め、と我々に勧めている。彼の勧める補填に、異論がある古典学者はどこにも居ないだろうと私は思う。省略されたされた言葉へこういう形の補填を確認しておくことは、なぜ ἐγώ ではなく αὐτός が使われているのかということ了我々が考える際、意味を持つだろうと予告しておこう。

ここでホメロスに見られる、友が友を明け方、「無理に」眠りから起こす情景として容易に思い浮かぶ一節を見てみよう*6：

*5 このことは、査読者のひとりの指摘する ἀγρυπνία καὶ λύπη を、Cr. のそれだと読め、という勧めにまっすぐには従わないという本稿の態度にもつながる。確かに ἀγρυπνία καὶ λύπη は S. にはなくとも、Cr. にはある（あるいはあっただろう）。しかし、その Cr. にはあったであろう ἀγρυπνία を指示するためなら、ἀγρυπνία καὶ λύπη につく限定詞は、ἐμῇ であったほうが簡潔な表現であったであろう。また、確かに、引用文までの二人のやり取りの言葉の裏を推定すれば、Cr. は ἀγρυπνία καὶ λύπη を症状として持っていたらしいとは確かに思えるが、その症状は引用文までの文脈にも、それ以降の文脈にも、文脈の表面に関する限り直截な言及を受けていない（老人が死を恐れるのは滑稽だという S. の主張（43 BII-2）に対しての、それは普通の老人の反応ではない、という Cr. の反論（43 CII-3）にも、Cr.（つまり普通の老人）の不安と不眠は当然含意されているが、この不安と不眠にも、あいかわらず Cr. のものだという直接の言及はない）。従って、Cr. の不安と不眠は、文脈の背後に読み取り可能なことからではあっても、指示語（τοσαύτη）の指示対象となるにはやや不適切である。この作品全体の構想から言ってもここで Cr. の不眠に光が当てられるのは不適切である。逆に S. が現在不安や迷いや恐怖による不眠と無縁だという事実（これは今問題にしている文の直後に明らかにされる）は、作品全体の構想の為に光を当てられる必要のある言及である。擬人化されたアテナイ法精神による説得によって、それを受ける側の、Cr. の誘いに乗った場合の架空の S.（架空の対話の話し相手としての S.）が完膚なきまでにたたき潰されてされてしまう。これがこの短い作品が持っている主要な構想であるが、S. が不安や迷い（不眠の原因）を、驚くべきことに既に克服してしまっている、という事実は、不安や迷いのはるかに先にある場所から S. が架空の対話を Cr. に聞かせるというこの全体構想にとって、光を当てる必要のある要素ではあるが、Cr. が現実の不眠を抱えているという事実は、構想の冒頭を構築するものとしては、光を当てる必要のない要素である。せいぜい、冒頭の 2 人物のやりとりにある種のリアリティーを与える為に劇作家としての Pl. が当然配慮していなくてはならない要素でしかない。問題にしているのが非現実文（οὐδὲ ἥθελον ἂν εἶναι）であるがゆえに、筆者の記述はややこしく聞こえる可能性があるが、ご容赦をお願いする。

*6 この前後の文脈では ἀγρυπνία の語は使われていない。それは、この語がギリシア語の中に成立した時期とも関わるだろう（本稿内でなされる Chantraine の語源辞典への言及を参照せよ）。しかし、引用する例

ἡ μὲν ἄρ' ὥς εἰποῦς' ἀπέβη πρὸς μακρὸν Ὀλυμπον,
 αὐτὰρ ὁ Νεστορίδην ἐξ ἡδέος ὕπνου ἔγειρεν
 λὰξ ποδὶ κινήσας, καὶ μιν πρὸς μῦθον ἔειπεν·
 “ἔγρεο, Νεστορίδη Πεισίστρατε, μώνυχας ἵππους
 ζευξὸν ὑφ' ἄρματ' ἄγων, ὄφρα πρήσσωμεν ὁδοῖο.”

Od. 15.43-7

さて彼女は以上の言葉を告げて後、オリュンポスの高嶺に向けて去った。

片や、彼*7の方は、ネストールの子を甘い眠りから叩き起こそうとして、
 足で彼の体を踏んづけて揺すった。そしてこう言った。

「起きてくれ、ネストールの子、ペイシストラトス。ひとつひづめの馬どもを
 軛の下へと結びつけてくれ。出立するためだ。」

オデュッセウスの消息を求めて、ネストールとメネラーオスのもとへテーレマコスを送り出していた女神アテーナーが、父オデュッセウスのイタケー王権奪還に息子を立ち合わせるために、呼び返しの命令を伝えた、その直後の場面である。テーレマコスは、一緒にメネラーオスのもとに滞在していたネストールの子ペイシストラトスを「叩き起こして」帰還の準備を急がせる。

ἐπεγείρω という動詞は、誰かが誰かに対して覚醒状態をもたらすような、いづれかそれをもたらす側に決然たる覚悟の必要な（つまりは、いづれか強引な）行為を言い表す動詞のように見える。上の例には ἐπι- はついてはいないが、その強引さ・攻撃性がわかりやすい（λὰξ ποδὶ κινήσας）。古代ギリシア人が、眠っている者を ἐπεγείρω するとは、つまりこういう情景を意味し得た。また、この動詞の比喩的な用法（LSJ s.v. ἐπεγείρω II, πόλεμον εὐδοντ' ἐπεγείρει, Sol. 4.19; δεινὸν μὲν τὸ πάλαϊ κείμενον ἤδη κακόν, ὦ ξείν', ἐπεγείρειν, S. OC 510; ὅσον ἐσμὸν λόγων ἐπεγείρετε, Pl. R. 450 B）も十分にこの間の事情（ある種の攻撃性）を伝えている。このことは、Cr. の最初の言葉を、「（あなたを叩き起こすなんて）とんでもない（οὐ μὰ τὸν Δία）。」と理解することを正当化するだろうし、ἐπήγειρά σε という補いを頭に入れて読むことの正しさを教える。S. の眠りの穏やかさ（ἡδέως καθεύδεις）が、あと 1 回かせいぜい 2 回しか、S. には許されていない、と Cr. は知っている。そのわずかな幸せの可能性しか友には許されていない、と知っている自分と、S. の問いに含まれていた ἐπεγείρω という言葉の持つ「乱暴なことをする」という響きが全く調和しないことから、極めて強い調子の否定語がとりあえず必要とされたと読むことができる。

は、私の知る限りのギリシア語文献の中で、我々が現在問題にしている場面と最も近い「睡眠と非・睡眠」を巡る状況であるように思える。

*7 = テーレマコス。

次にもっと大事なことは、引用例中の下線部が、*τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη* の持つ意味を理解する大きな助けになるように思えることだ。明け方の眠りを楽しんでいるペイシストラトスを「叩き起こす」ことを口承詩人は「甘い眠り (*ἡδὺς ὕπνος*) から目覚めさせる (*ἐγείρειν*)」と歌っている：

まず、「*ἡδὺς ὕπνος*」という組み合わせのホメーロスでの使われ方を簡単にみてみよう：

γλυκὺς ὕπνος (*Il.* 1.610); *νήδυμος ὕπνος* (*Il.* 2.2, *h. Ven.* 171); *ὕπνον* || *ἡδύν* (*Od.* 1.364–5)

母音の右肩に付した上付き数字は Dactylic Hexametre の Princeps の位置を知らせている。Formula 的な匂いもなくはないが、*ἡδέος ὕπνου* は、明らかにその域には達していない、とわかる。だから、LSJ の記載例を挙げるにとどめる。Formula 的な匂いは、言うまでもなく「眠りは甘美」という形容詞と名詞の組み合わせが一般的真理の域に達している事実の証左だ。

次に「*λύπη*」である。現代人は *le spleen* 「憂鬱」などという近代の大都市の本質を言い当てる著名な名詞を思い浮かべ (ボードレール)、この語をその響きの中で捉える習慣に、無意識にではあろうが、陥っているように思える。だが、それとは相当に異なる響きを古代ギリシア語は持っていたことが次の例示から明らかになるだろう。*λύπη* は非常に多くの場合において、*ἡδονή* との対比的組み合わせで意識されていたのだ。つまり「快」の反対語として意識されていたと言ってよい。これについては Ast の *Lexicon Platonicum**8 に頼ることにしよう：

1. οὐκ ἐναντίον φαμέν *λύπην ἡδονῇ*, *R.* 583 C
2. *λύπην ... ἡδονῆς* (*παύλαν εἶναι*), *R.* 584 B
3. *λύπαί τε καὶ ἡδοαί*, *Lg.* 644 C, *Phlb.* 37 C
4. μεθ' *ἡδονῶν ἢ λυπῶν*, *Smp.* 207 E, *Lg.* 862 D
5. *ἐν τε λύπαις ὄντα ... καὶ ἐν ἡδοαῖς*, *R.* 429 C
6. *ἡδονάς τε καὶ λύπας*, *Prt.* 354 C

上に掲げた例は、Pl. による *λύπη* を巡る全用例のほぼ半分を占めている。端的に言えば、Pl. にとって、*λύπη* とは、ほぼ *ἡδονή* 「快・甘美」の反意語たる名詞だったということだ。時間があれば Ast の *λυπηρός* の項目も見てみるがいい。

もうひとつ、「*ἀγρυπνος*」について、簡単な言語的事実を挙げることにしよう。今度は P.

*8 Ast, II, 261.

Chantraine によるギリシア語語源辞典の力を借りる：

«*ἄγρυπνος*»: *ἀγρός* + *ὑπνος*: « qui dort, passe la nuit dehors, qui veille » (Hp., Pl., ionien-attique)

Chantraine の使用状況についてのコメントにあるように、それほど古典期でも（～前 4 世紀半ば）使用が頻繁だった語ではないことは明らかであるから、合成語の本来の合成事情を我々の用例が保っている可能性は高い。実際、「野（*ἀγρός*）」の「眠り（*ὑπνος*）」という意味は合成された後の形にも間違いようがなく残されている。安全な我が家の寝室ではなく、野に寝ることが危険で不快なものであることを、この合成語は紀元前 4 世紀の初頭にも響かせていたに違いない。*ἄγρυπνος* とは、野獣や殺人者が満ちているかも知れない野外の睡眠の持つ、「甘美」からは遠い、「眠りたいが眠れない」不快な状態を言う形容詞であり、*ἀγρυπνία* とは、そのような睡眠に関する状態を表現する名詞だということだ。大都会の発する巨大な社会的圧力の下でうめく近代人の苦悩の代名詞とも言える「不眠」とは必ずしも直結しない。*ἀγρυπνία καὶ λύπη* とは、先に登場したネストールの子のペイシストラトスが、オデュッセウスの子のテーレマコスに明け方寝ているところを乱暴に起こされた時に感じたに違いない「眠りたいが眠れない」不快な状態のような*9 ものを引き起こすのではないかと危惧した Cr. の発言ではないか、といちおう結論しておこう。明らかに自分が *ἐπήγειρά* σε したならば、S. にそのような不快を与えることになるのでは、という脈絡が、取り上げた 3 文の前半からは浮かび上がってくる。

ただ、ギリシア語語源辞典と叙事詩の一節のみから、私たちの探求のキーワードとも言える *ἀγρυπνία* を理解するのはあまりにも危険だとも思えるので、確認をも兼ねて、辞書などが参照を促しているいくつかの *ἀγρυπνία* 用例を検討しておこう：

1. *ἀγρυπνίας* δὲ καὶ τὸν ἄλλον πόνον τίτθαις τε καὶ τροφοῖς παραδώσουσιν 「寝ずの番その他の労苦を乳母や養育係に割り当てるだろう」（Pl. R. 460 D）。
2. *κομφοτέρας* δὴ τιнос, ἣν δ' ἐγώ, ἀσκήσεως δεῖ τοῖς πολεμικοῖς ἀθληταῖς, οὓς γε ὥσπερ *κύνας ἀγρύπνους* τε ἀνάγκη εἶναι καὶ ὅτι μάλιστα ὁξὺ ὄραν καὶ ἀκούειν 「より手の込んだトレーニングがこれら戦の競技者たちには、だから必要になってくるだろう。この者たちには獵犬のごとくに、夜を徹しての任務につかねばならないし、目や耳

*9 たたき起こされたペイシストラトスが、*λυπηρὰ ἀγρυπνίῃ* の状態にあったとは叙事詩は歌っていない。「死すべき者ども」の経験する心的状態を表現する語彙が未だ発達していなかったのでは、とも想像してよいであろうか。ただ、「友」のこの緊急かつ乱暴な行為に対して、ペイシストラトスは依頼・命令を拒否してみせる。もちろん、拒否にはもっともらしい理由がつけられている。もっともらしいが、しかし、その拒否にはむしろ、ペイシストラトスが感じた *λυπηρὰ ἀγρυπνίῃ* が込められているのかもしれない。

の力に関しては、考えられる限り最も高度の能力を持たねばならないからね」(Pl. R. 404 A)。

3. τοὺς ἄλλους ἀποκτεινῶσαν (sc. ἀδικίαν), εἴπερ οἶόν τε, τὸν δ' ἔχοντα καὶ μάλα ζωτικὸν παρέχουσιν, καὶ πρὸς γ' ἔτι τῷ ζωτικῷ ἄγρυπνον· 「(不正は) 他者を、いやしくもそれが可能であるならば、殺すし、その上、不正を犯す者をも、極めて生命力に満ちた者しておいて、そのうえその者を、夜っぴて目を見開いている状態にするものなのだ」(Pl. R. 610 E)。
4. οἱ δὲ στρεβλοῦντες καὶ βιώμενοι τὸν πόδα κακὸν μέζον ἐργάζοντο. ἐπ' ἑπτὰ μὲν δὴ ἡμέρας καὶ ἑπτὰ νύκτας ὑπὸ τοῦ παρεόντος κακοῦ ὁ Δαρεῖος ἄγρυπνίῃσι εἶχετο. 「この医師たちはダーレイオスの足首を乱暴にねじってより大きな痛みを与えてしまった。それで、彼は、7 昼夜にわたって、襲ってくる痛みで眠れずじまい、という仕儀となった」(Hdt. 3.129.2-3)。
5. ἀλλ' ἔστιν ὑπ' ἐμοῦ πρᾶγμα' ἀνεζητημένον | πολλαῖσι τ' ἄγρυπνίαισιν ἐρριπτασμένον 「(そんなのではなくて) 私の頭が、数多くの夜を寝ないままに、追求し、小突き回したことになります」(Ar. Lys. 26-7)。
6. ἀλλ' ἦλθεν αὐτῷ Ζηνὸς ἄγρυπνον βέλος, | καταιβάτης κεραυνὸς ἐκπνέων φλόγα, 「だが彼を、ゼウスの眠ることなき矢が襲った。空からの火を吐く雷が」(Aes. PV 360-1)。

6 の ἄγρυπνον βέλος がこの語彙の古典期的 (用例は前 5 世紀半ば以降に集中する) 意味を知るには難しい例かもしれない。あくまでも推定ではあるが、たぶん、ゼウスの権力の中樞 (あるいは王宮) を守る護衛兵としての雷の擬人化という詩的過程がここで働いている。目を凝らして敵を見張り、かつ敵に襲いかかる見張り番・護衛兵として雷を表現する擬人化である。語源辞典と叙事詩の一場面からなされた本稿筆者による推定は那样的外れではなかった。ἀγρυπνία とは、単に眠っていない、という事態を言うのではなく、眠る (甘美な眠りを享受できる) べき時にその楽しみを味わえる可能性を奪われている状態を基本的には意味している。眠りが取り上げられる原因は、多くは、外からの働きかけ、ないしは命令 (1, 2, 4 と恐らくは 6) であり、奪われる側の精神的・肉体的原因による例は多くはない (5)。3 も、不正によって支配されている本人にとっては自発的な ἀγρυπνία と見えているかもしれないが、実は彼にとりついた不正が命令しているにすぎない例といえるだろう。そのように見えるように文は構成されている。

たぶん、上の引用からの結論は、Cr. の言っている ἀγρυπνία とは、迫り来る死刑の実行を前にしての惑乱からある人間が眠りを奪われてしまっている事態である、と「近代的に」結論するのは、この語の用法の当然の帰結であるとみなすことはできない、というこ

とがひとつ。また、本稿が今なしつつある追求に即して言えば、「甘美な眠りを享受できているべき時間帯に外的な妨害（この場合 Cr. による「たたき起し」）が入って眠りを奪われる状態」を言う語であるとするのが妥当な結論ということになるだろう。

4

以上で、本稿が課題とした 3 つの文のうち、最も大きな問題を内包していると思われる 2 番目の文の核心的な問題については、満足すべき理解を得るための基礎が獲得されたように、少なくとも本稿筆者は感じる。Cr. は、S. が今置かれているであろう精神的状況（避けることのできない死がせまってくる）を想像して、そのような状態に、自分は居たいとか、居たくないとか言っている訳ではない。もし、眠りを楽しんでいる S. を乱暴に起こせば、そこで現出されるものは、自分でもその中に居たい気にはなれないような、眠りを奪われた不快な状態だと言っている。以下では、冒頭に引用した *Crito* 43 B3-6 の本稿筆者訳を掲げ、その訳に注釈を付すという形でこの小さな探求のまとめとしたい。

S. それでいて、どうしてすぐぼくを（たたき）起こさずに、黙ってそばに坐っていたりしたのはどうした事情なのか。Cr. （たたき起こすなんて）とんでもない、ソクラテス、たたき起こす側にしたところで、（覚醒直前の甘い眠りを妨げられての）眠りを取り上げられた苦しい状態にいるなどごめんだからね。（確かに黙って坐っていたが）そればかりでなく、きみがいかにも気持ちよさそうに眠っているのを認めて、さっきから感心してもいたのだ。それでわざと、きみを起こさずにいたのだ。君ができるかぎり甘美な時間を持てるように、というのがぼくの意図するところだよ。

注釈 1 ἀγρυπνία καὶ λύπη はたぶん典型的な hendiadys (Smyth §3025) で、λυπηρὰ ἀγρυπνία (〜 ἡδὺς ὕπνος) という形容詞+名詞を、2 つの名詞で表現したもの。そして ἡδὺς ὕπνος という「人類のすべてが共有する」表現ともいえるものの裏側にある句であろう。たぶん hendiadys といういくらか詩的な修辭的表現は ἡδὺς ὕπνος という半ば詩的伝統の一部となっている句への Cr. (あるいは Pl.) からの反応であろう。

注釈 2 τοσαύτη という指示語は、Cr. が信じている一般的真理を指示している。本稿筆者も ἀγρυπνία καὶ λύπη が「それほどに、あるいはそのように不快なものである」ことを知っているし、Cr. はその他に、この指示語が有効であるはずの対話相手を、S. ばかりではなく、かつて存在し、あるいは現に存在する「死すべきものども」の全てにまで拡大することができるかと本稿筆者は確信する。だから τοσαύτη を使っている Cr. の（あるいは使

わせている Pl.) の語彙選択は正確である。

注釈 3 οὐδ' ἂν αὐτὸς ἦθελον での οὐδ' は、注釈者たちの多くが指摘しているそのとおりであって、οὐ μὰ τὸν Δία の οὐ とは直接には関連しない*10。つまり οὐ ... οὐδ' という結合は認めることができない。αὐτός は、前文で省略された定動詞 οὐ μὰ τὸν Δία (sc. ἐπήγειρά σε、上述参照) の主語であるという「統語論上の身分」のみを強調しており、2 人称 (あなた) に対する 1 人称 (私) という身分をなるべく隠そうとしている。「たたき起こされる側 (αὐτόν) もそうだが、起こす側 (αὐτός) にしたところで、そんな状態になりたくない点では同様だ」であり、文全体が肯定文なら οὐδ' ではなく καί (connective ではなく adverbial な) が使われる環境の中にある。したがって οὐδ' ἂν αὐτὸς ἦθελον 文はこの文が前の文に対してどのような文脈的な関係にあるかを語る文連結詞 (sentence connection) を欠いている (asyndeton)。asyndeton 文の多くがそうであるように、この 2 つ目の οὐδ' ἂν ... 文も、直前の文への説明・理由開示として働いている (Smyth §2167b)*11。

*10 この見解を明言しているのは Adam (*ad* οὐ μὰ τὸν Δία)。本稿筆者も賛同する。οὐ—οὐδέ が並列構造を作り出すには、οὐ—οὐδέ が導いている文の表現水準が事実性に関して違いすぎる (単なる過去の事実の報告と、過去ないしは現在の非現実の推定文)。

*11 καί がそうであるように、その否定形でもある οὐδέ も、文接統詞でもあり得、語の水準の連結詞でもあり得る。そもそも asyndeton は対象そのものが、「ない」という特性を持っているせい、古典語研究の中で、「形を持って存在する」Particles の分類・研究に比べてはるかに遅れている。そういう事情もあるに違いないと思うが、本例のぴったりした類例はまだ、筆者には見つけられていない。ただ、次の例が参考になると考えている: τί δὲ σύ; πῶς ποιήσεις; οὐδὲ γὰρ οὐδέ τὸν σὸν εἵταιρον δεῖ παρελθεῖν 「でもこれはどうなんですか? あなたはどうするつもりなんですか? だって、あなたの仲間 (イソクラテースのことを指す) のことにも言及しないで済ますわけにもいかないでしょう」(Phaedr. 278 E4)。οὐδὲ γὰρ οὐδέ で始まる文が先行する 2 つの問いを発したパイドロスの問いの根拠を語っているものであることは見やすいであろう。もし、Yunis, 244 の解説するとおり、οὐδὲ γὰρ οὐδέ の 2 つ目の οὐδέ が、οὐδὲ γὰρ の否定を単に強めたものであるとすれば、この例は我々の asyndeton と判定されている οὐδ' ἂν ... 文が、先行発言に対して、後続する根拠・理由文を導く、と読むための平行例 (ただ引用例の場合は asyndeton ではなく、γάρ という syndeton を持っているという違いがあるが) たりうる。この (γάρ つきのほうの) 語法は一般化できる。Denniston, GP III である。ここでは οὐδέ ... γάρ / οὐδὲ γάρ には、γάρ が sentence connective である場合と、οὐδέ がその役割を果たす 2 つの類型があると、GP は指摘している。本稿筆者が近似例だとみなすのは前者の類型に属するものとして挙げられているいくつかの例である。ここでは οὐδέ は γάρ との間に挟まれた語 (οὐδέ ... γάρ の形を取る場合) あるいは γάρ に続く文本体 (οὐδὲ γάρ の形を取る場合) への多かれ少なかれ adverbial なものとして働いており、sentence connective としては働いていない、と GP は見ている。実例を引こう。ἀξιοῦμεν δὲ Ἕλληνες ὄντες καὶ αὐτοὶ ὑφ' ἑμῶν ὄντων Ἑλλήνων ἀγαθὸν μὲν τι πάσχειν, κακὸν δὲ μηδέν· οὐδὲ γὰρ ἡμεῖς ὑμᾶς οὐδὲν πώποτε ὑπὴρξάμεν κακῶς ποιούντες 「我々がギリシア人であることを考慮すれば、君たち同じくギリシア人からよい待遇を得るべきであり、ひどい扱いをされるいわれはないと主張したい。我々のほうが加害行為の開始者となつたいきさつなど、いままでひとつもないからだ」(X. An. 5.5.9)。ここでは、γάρ が文接統語であって、οὐδέ は [我々] が πάσχειν の主語から、ποιεῖν の主語へと変わる点を強調する対比的・副詞的な役割を、つまり ἡμεῖς を強調する役割を果たしている。我々の οὐδέ とほとんど変わらない。たったひとつ違う点は、sentence connective の役割を果たすべき γάρ が我々の例では省略されている点である。さらに類似点を言えば、Denniston, GP が引くこの類型 (οὐδέ ... γάρ / οὐδὲ γάρ や単にその肯定形である καὶ ... γὰρ / καὶ γάρ, cf. Denniston, GP 110) の非常に多

注釈 4 ἀλλὰ καὶ ... の ἀλλά は、だから、直接には οὐ μὰ τὸν Δία の οὐ と呼応する。すると、οὐ μὰ τὸν Δία ὡς ἥδιστα διάγης 文群はほぼ忠実に S. による πῶς οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με, ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι; に対応した構造をしていることになる。οὐδ' ἂν αὐτὸς ... λύπη εἶναι は後でギリシア語本文の形で提示して明らかにするように、説明的挿入文であり、音読する際には、前後に小さな息継ぎを置き、前後の文とは音調を違えなければならない。注釈 6 参照。さらに詳しく言えば、πῶς οὐκ ...; という S. の問いを、πῶς は οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με と ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι の双方にかかるものと理解して Cr. は答えていることになる。すなわち、οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον は πῶς οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με; に対する（より正確には πῶς に対する）答えである（πῶς は理由、「とんでもない、自分だってその中に居たくないような不快な気分を引き起こすから」）。一方で、ἀλλὰ καὶ σοῦ πάλοι θαυμάζω αἰσθανόμενος は πῶς ... ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι; に対する解答になっているからだ（πῶς は様態）。

注釈 5 注釈 3 から当然導かれることとして、ἀλλὰ καὶ ... θαυμάζω の καί は遠く θαυμάζω ὅπως ἠθέλησέ σοι ὁ τοῦ δεσμοτηρίου φύλαξ ὑπακούσαι (A5) での S. による θαυμάζω にこの θαυμάζω を付け加える役目を果たしているとする Adam や Emlyn-Jones の注釈は恐らく的外れで、σιγῇ παρακάθῃσαι に対応すると理解するのが正しいことになる（ただ黙って側に坐っていたのではなく、あなたに対する驚嘆の念も感じつつ坐っていたのだ）。

注釈 6 Nicoll の最新版 *Crito* のこの部分の punctuation に関して特に重大な問題があるとも感じていた訳ではない。だが、読者の理解や正確な音読を助けるには次のような処置のほうがより適切ではないかと筆者は感じている。もしも書き手の側が創造した際に、音声の水準で考えていた言葉の列にも近付けるのが punctuation を考える時の基本であるとするならばであるが：οὐ μὰ τὸν Δία, ὦ Σώκρατες, —οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνίᾳ καὶ λύπῃ εἶναι,— ἀλλὰ καὶ σοῦ πάλοι θαυμάζω αἰσθανόμενος ὡς ἡδέως καθεύδεις・

付加的注釈 ἡδέως καθεύδεις に関連し、付け加えをする文（καὶ ἐπίτηδες σε οὐκ ἤγειρον ἵνα ὡς ἥδιστα διάγης）の中で、（たたき）起こさなかったことへの最初の理由（οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνίᾳ καὶ λύπῃ εἶναι）とは、ある意味で水準を異にする、「たたき起し自粛」への、個人的に Cr. が S. に対して持っている「友愛」を表現する、もうひとつの理由あるいは目的が語られている。私たちが主として見て来た 3 つの文は、本稿筆者が見る限りでは、もしも自分をこの夜明け前に牢に来させた衝動のままに「たたき起し」をしたら、引き起こされていたであろう S. の側の不快を引き起こさない為にした「自粛」を

くにおいて、οὐδέ や καί によって強調されているのが、I 人称単・複代名詞あるいはその関連語を選んでいることである（我々が問題にしている例で強調されているのは αὐτός = ἐγώ）。

語っているにすぎない。紳士の自粛、と言ってよいだろう。しかし、この付加文では、その自粛が、単に夜明けの目覚め直前の眠りの甘美さを知った紳士の自粛であるばかりではなく、その楽しみを得る機会が S. には数えるほどしか残されていないことを知る友人としての Cr. が、その楽しみを最大限に得させるための自粛であったことを語るのだ。友に無限の共感を有している者の、友愛がゆえの自粛と言ってよいだろう。

5

以上のように Pl. *Crito* 43 B3-6 を解することによって、Cr. という S. の大切な友人を、実は友達がいのない、友に値しない友だったのではないか、という故なき疑いから我々は解放することができるだろう。また、この理解によって始めて、我々は見抜く可能性を確保できるのである。第 1 に、S. と比較してみれば、多少論理完徹という点でてぬるいところはあっても、S. に最後まで友愛とともに親身に付き添った人物として Cr. をこの対話篇の作者は捉えていたこと。あるいは描き出していること。第 2 にその友愛と理解と親しさは、S. をして、人間が集まって作り出す、法を媒介とした全体、すなわちポリスと「その多くの者たち」が作り出す全体と、その全体へと否応無く巻き込まれてしまっている者である個人としての S. の間に必然的に生じざるを得なかった緊迫した軌轢を、『弁明』の「そらとぼけ」とは全く違った局面で語り出さざるを得ない場所へと追いやる力を持っていた、という事実を。そしてこの事実こそが、この対話編の根本構想であり、この作者は、冒頭の短いやりとりでその根本構想を成立させる大きな役割を託したのだ、ということ。これらのことを見抜く可能性を上を読み直しは、いちおう確保しえた、と筆者は主張したい。

(北海道大学、東京古典学舎)

Bibliography

田中美知太郎 (訳) 『クリトン』、世界古典文学全集 17 (プラトン I)、筑摩書房、東京 1964。

Adam, J. (ed. com.), *Platonis Crito*, Cambridge 1903.

Ast, F., *Lexicon Platonicum*, Leipzig 1835 (= Cambridge 2012).

Burnet, J. (ed. com.), *Plato, Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Oxford 1924.

Chantraine, P. (ed.), *Dictionnaire Étymologique de la Langue Grecque*², Paris 1999.

Denniston, J. D., *The Greek Particles*², Oxford 1950.

Duke, E. A., et Nicoll, W. S., et al., *Platonis Opera I* (Oxford Classical Texts), Oxford 1995.

- Emlyn-Jones, C. (ed. com.), *Plato, Crito*, Bristol 1999.
- Fowler, H. N. (tr.), *Crito (Plato in Twelve Volumes)*, Vol. 1, Cambridge, Mass. and London 1966.
- Grube, G. M. A. (tr.), *Crito* (in *Plato, Complete Works*, ed. J. Cooper), Indiana 1997.
- Liddell, H. G., Scott, R., and Jones, H. S., *A Greek-English Lexicon*, 9th edn., Oxford 1940.
- Smyth, H. W., *Greek Grammar*, Cambridge, Mass. 1956.
- Yunis, H. (ed. com.), *Plato: Phaedrus*, Cambridge 2011.